
演劇IFストーリー 猫と絆

きらきら星

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

演劇IFストーリー 猫と絆

【コード】

N6131D

【作者名】

きらきら星

【あらすじ】

慎也はある日子猫を拾った。その猫は普通の猫ではなかった。猫と暮らすようになって慎也は少し変わったりする。

第一話 出会い（前書き）

慎也しんやと愛華あいかは同じ名前ですが、演劇団長とは関係ありません。
短い連載になりますがよろしくお願いします。

第一話 出会い

学校帰り外は雨が降っていた。朝はあんなに晴れていたのに水しぶきが見えるほど強い雨が降っていた。

「不味いな」

「慎也どうするよ」

「コンビニよるか、じゃあな誠」

悪友と別れた俺はコンビニまで走り傘を買い遠回りの帰宅をすることになった。

まったく、雨なんて嫌いだ。服は濡れるし洗濯物は乾かないからな。

帰り道の途中で愛媛みかんのダンボールを見つけた。

もしかやと思ったが思ったとおりだった。中には新聞紙とびしょ濡れになった子猫が一匹入っていた。

箱の隅の方には給食に出るようなパンが置かれていた。

その横にあるメモを俺は広げた。雨に濡れ読みにくいが要点は分かった。

『この子達を可愛がってあげてください』だ。

この子達？と中を見るが一匹しかない。新聞紙の下を見て見たがない。どうやら他の猫は連れて行かれたようだ。つまりこいつは売れ残りみたいなものか。

「不運だったなあお前」

撫でようとしたら噛み付かれた。子猫のくせに威嚇は強く感じさせた。拾われなかった理由が分かる。

「それじゃあな。いい人に拾われるよ」

傘を置いて走って帰った。あれだけ強気な猫ならなんとかなるかもと根拠の無いことを思っていた。

「ただいま」

家に帰るが誰もいない。親はそろって海外で働いている。

俺の世話は親戚の人に頼んであるそうだが一度も顔を見たことない。

生活費は大量に送られてくるので生きていくのには困らない。

よく『大変だね』とか言われるが慣れてしまえばたいしたことない。

唯一困ることは風邪をひいたときぐらいだ。咳をしてもなんとかを聞いて涙が出てきたほどだ。

一人で家事をこなすことはなれている。

ときばきと夕食を作り始めた。が、メインのパスタが無かった。

下準備が済んでいてそれは不味い。渋々パスタを買いに外に出ることにした。

外は雨ではなく雪が降っていた。ここ数年見ていないので少し感動した。

近くの店で目的のものを購入した帰り分かれ道で立ち止まった。

真っ直ぐ行けば家なのだが曲がればさっきの猫のいる場所に行く。

たぶん、いや絶対いる。そんな確信があつて見に行くことにした。

愛媛みかんのダンボールは薄っすらと雪が積もっていた。

置いていった傘がなくなっていた。

あれならどこかにいつてしまったかもしれない。

だが、中には白く染まり始めた新聞紙に包まれた子猫がいた。

「まだいたのかよ」

俺はただ立ってそれを見ていた。

死んでしまったかのようにじっとしている。

小刻みに息をしているのがお腹の動きでわかるだけでそれだけが生きている証拠だった。

「どうして他の所にいかないんだ」

答えることなんて無いがしゃがんでその猫を見ていた。

他の兄弟は連れて行かれたのに自分だけ残されたこいつは何を考
えているんだろう。

哀れみではない。まるで自分を見ているようだ。

「お前も一人なんだよな」

手を伸ばすとやはり噛み付かれた。

だけどさつきより弱弱しく噛み付くというよりしゃぶっているか
のようだ。

今にも死んでしまいそうに弱い。

箱の中は白くなってゆきこいつの小さな天国となろうとしていた。

「たく、しょうがねえなあ」

愛媛みかんの家ごともって帰ることにした。

第一話 出会い（後書き）

ジャンルは恋愛となっていますがとても柔らかくて淡い恋愛なので
分かりにくいと思います。

第二話 再会

人肌に暖めたタオルで体を擦るとすぐに元を取り戻した。今度は触っても噛み付いたりはしなかった。猫の前に暖めたミルクを置くがまったく飲もうとしなかった。

「おい飲まないのかよ」

ミルクに指をつけ差し出してみた。すると匂いを嗅ぐと指を舐めた。それを何度か繰り返して皿を出したが自分で舐めようとはしなかった。結局全部指で飲ませた。

「一人で飲めるようになるうな」

頭を撫で俺は寝ることにした。

布団の冷たさは嫌いだ。すると、足元から猫が入ってきた。俺の顔のところまで来て丸くなって眠り始めた。その時初めてこいつは雌だとわかった。

「飼うなら名前を決めなきゃなあ」

枕元にある写真立てに手を伸ばす。そこには俺と女の子が写っている。思い出の大切な写真だ。

「よし、お前の名前はアイカだ。よろしくな」

朝、昨夜雪が降ったせいで寒くて暗い朝だ。幸運なことで学校は休みだ。一人だと時間を好きに使うこともある。

寒さに耐えられなくなった俺は腹の側にいるであろうアイカを引き寄せるために手を伸ばした。が、アイカはいなかった。布団をめぐってみても毛がついているだけで本人がいなかった。

こたつの中もテレビの裏も部屋中探したがアイカはいなかった。

「どこに行ったんだ」

部屋を見渡していると首筋を冷たい風が撫でてきた。白く曇った窓が少し開いていた。完全に閉めていたはずなのに猫一匹が通れるぐらい開いていた。

「あいつ」

急いで外に出ると地面は薄っすらと氷が張っていた。俺は転ぶことも考えず辺りを探し始めた。

家から出て猫がいそうなところをくまなく探して走った。雪が少し積もっていたがどこにも猫の足跡など無かった。もしあったのだとしても人間の足跡で消されていた。

分かれ道、ここでした俺の判断がもし違ったらアイカを捨てることは無かった。それどころかアイカはもう……。嫌な予感が走りアイカのいたところへと走った。

箱があつた場所にアイカはいた。雪の上に座ってただじっとして
いた。

アイカの前には小さな女の子とその母親の二人がいた。女の子はアイカに何か与えていたようだがアイカはそれを食べようとしなかった。俺はそれを遠くから見ていた。

「ママ、猫さん連れて帰ってもいい？」

「どうしましょうかねえ」

アイカを連れて帰る。それもあいつの生きる道なのだろう。俺に飼われるよりあのこの方がずっと可愛がってくれそうだ。

「お願い！」

「わかつたわ、いいわよ。連れて帰っても」

女の子がアイカを抱きかかえる。これでいいんだ。俺は何も言わずここで見送ろう。

熱くなった。久しぶりに心が熱くて何かが溢れ出そうになった。

突然、アイカが落とされた。女の子に噛み付いたのだ。

「アイカ！」

無様に地面に落ちたアイカを呼んだ。俺に気付いたアイカは俺の胸の中に飛び込んできた。冷たい。冷たいアイカを強く抱きしめた。
「貴方の猫なの？」

「はい、そうです」

「そう、気をつけなさいね」

泣きじゃくる女の子を連れて母親は帰っていった。

「どうして出て行ったりした。心配したんだぞ」

アイカを強く抱きしめその場に崩れるように座り込んだ。服が濡れるとか人の目がとかそんな物どうでもよかった。頬にアイカを押し当てアイカ存在を確かめた。

「アイカ、もう俺の前からいなくなったりしないでくれ」

アイカは熱く流れる俺の気持ちを舐めながら小さな声で鳴いた。

第三話 変な猫はどこまでも変だった

ペットシヨップによってから家に帰るとアイカはこたつの中に潜っていった。あそこが暖かいと知っているのか？

俺は何年も使っていない部屋に向った。俺の部屋の隣にあるその部屋は使われなくなってからまったく変わっていない。ここだけ時間が止まっているようだ。

その部屋の隅に一度も着られることが無かった中学の新しい制服がある。馬鹿な奴で入学まで何ヶ月もあつたのに無理言つて買つてもらつたくせに一度も着なかつた。

初めて着るときは俺と一緒に登校する時だとか言っていたっけ。

その制服のポケットを探るとあいつのお気に入りだったリボンと鈴が入っていた。

両方とも俺からの贈り物だ。リボンは誕生日プレゼントだったが鈴はお祭りの残念賞だったはずだ。それなのにあいつはこれを毎日身に付けていて大事にしていたな。

「これが丁度いいだろう」

両方を握り締めアイカのいる自分の部屋へと戻った。

「おーい、アイカ」

こたつの中からアイカを引きずり出した。嫌がることも無く俺の膝の上で大人しくしていた。アイカの首にリボンを通した鈴を結びつけた。

「よし、大切にしろよ」

首にある違和感が気に食わないのか鈴を取ろうとしていた。そのたび鈴が鳴り懐かしくなる。この音の後には笑顔があつたんだよな。

「そろそろ飯にするか」

まだ夕飯には早い俺もアイカも2食続けて抜いている。そろそろお互い限界だ。

ショップで色々聞いてきた。まだ子供だと思っていたが人間で言う俺と同じぐらいの歳らしい。こんなに小さいのは成長が遅いだけだそう。店員に進まれるまま購入した猫缶の一つを皿に盛って前に置いた。その横で俺もカップラーメンをすすっていた。あちこち走ったのにくわえ空腹なので自分で作る気などまったく無かった。アイカはご飯を目の前にそれに口をつけることなくじつと俺を見ていた。

「どうした、食べればいいぞ」

だが、アイカは食べようとしなかった。空腹のはずなのにおかしい。俺は一口分指に乗せ差し出してみた。すると、すぐにそれを食べた。

「食べられるんだな」

自分の食事に戻る。が、アイカはまた食べようとしなかった。

「まさかお前」

俺はスプーンを持ってきてご飯をすくって差し出した。すると、さっきと同じで食べ始めた。つまりアイカは……

「俺に食べさせると」

アイカの食事を済ませてから俺は伸びきったカップラーメンを食べる破目になった。

その間ずっとアイカは俺の膝の上にいた。

「自分で食べられるようになってくれよ」

食後、アイカを撫でていると手に砂が着いた。長い間外にいたんだ、汚れていて当然か。

「風呂に入るか」

猫は水を嫌うと言うそうだがアイカは違った。俺が先に入っておこうと思ったがそこにアイカが飛び込んできたのだ。首だけを出して俺を見ていた。

「風呂好きなのか」

経験したことが無いからだろうか水をまったく脅えていない。こっちは楽だから良いけど。

「アイカ、逃げるな」

言って通じる訳でもなく俺はアイカを部屋中追いかけていた。俺はタオルとドライヤーを持ってアイカを部屋の隅まで追い込んでいた。

久しぶりにアイカの威嚇を見た。俺は可愛い威嚇に屈することなくタオルを使ってアイカを包み込んだ。

「手間かけさせやがって」

タオルで拭きながらドライヤーをかけてやった。暴れるアイカを足で挟み込みなんとかドライヤーをかけ終わった。水は大丈夫だけどドライヤーは駄目なのか。

「どつと疲れた。もう寝よう」

布団にもぐりこむとアイカも入ってきた。昨夜と同じ場所で俺から見えるところにわざと丸くなっているようだ。猫ならもつと奥に入っていくと思うのだがアイカは枕に近い所に居る。

「お前ってかわってるよな」

問いかけても答えてくれるわけではない。

「お前が人間だったら話できるのにな」

そんなことをばやきながら俺は深い眠りについた。

遮光カーテンの隙間から朝日が入ってくる。昨日と同じく今日も学校は休みだ。週休二日制万歳。俺はカーテンを開け朝日を浴びた。それでもまだ睡魔が残っているので休日の醍醐味二度寝をしようと布団に戻った。

昨日より他の温もりを感じアイカが存在が確かめられた。だが、その温もりは猫の大きさをはるかに超える大きさだった。

「アイカ?.....」

寝ぼけた目を擦ると目の前には同じ歳ぐらいの女の子が寝ていた。誰だ?見たことない子だな.....

そのまままた眠りにつこうと.....

「つて、お前誰だよ」

布団をどけその子を良く見た。が、すぐに目を背けた。その子は何も着ていなかったのだ。

布団の真中で丸くなって寝ていたその子が目を擦りながら目を覚ました。

目覚めての第一声に俺は自分の過去を疑った。

「おはよう。パパ」

パパ？いつから俺は父親に？それにどう見ても歳が合わないだろうが。

「そうじゃないなあ。うん、兄さん？」

こめかみを押さえながら考えている女の子にタオルを投げて背を向けた。

「とにかく、体を隠せ、なんで裸なんだよ」

「？変な兄さん」

タオルを頭からかぶったその子の首には見慣れたリボンと鈴がついていた。

「まさか、アイカか？」

「やっぱり分かってなかったんだ。そうだよ、アイカだよ」

猫のときのように俺に飛びついてきた。自分の格好をまったく気にせず俺に抱きついてきたアイカに俺は焦りを隠せなかった。

第四話 猫と人間の違い

落ち着いて考えてみよう。俺は猫を拾った。そしたらその猫が女の子になつていた。以上。

意味が分からん。どこで人間になる条件を満たしていたんだ。助けたから？つまりこれは鶴の恩返しのなもの。しかし家は機織りをして稼がなければならぬほど貧しくは無い。

いや、嬉しいのかと聞かれれば嬉しいに決まっている。可愛いし、俺になつているし、すつごく甘えてくる。ただ、女の子だと言うことだけで猫のアイカと変わらない。

「兄さんどうしたの？」

頭を撫でると気持ちよさそうな顔をする。残念ながら耳は生えていない。外見は普通の女の子だ。

「とりあえずだな」

「なあに？」

「どいてくれないか」

アイカはずっと膝の上に座っていた。本人はいつもと同じことをしているつもりだろうが非常に重く、いや、女性を重いと言っては失礼か。それ以上に今のアイカは何も着ていなくて……

「うう〜、分かったあ」

アイカは布団の上に座った。俺は慌てて隣の部屋へ走った。

入るなり目に入った服を取って戻った。手に持ったのは一度も着られたことのない服だ。

「これを着ろ」

アイカに渡すが首を傾げて俺を見ていた。

「服？兄さん着させて」

こいつ、服を知ってるのか。

「自分で着れないのか」

「うん。だ・か・ら」

両手を広げて着させると主張していた。俺はため息を吐き目を閉じながら服を着させた。

中学校の制服だがアイカにぴったりなサイズだった。リボンの時とは違い気に入っているようだ。

「ようやく一息つけたか」

「兄さん。いきなりどうして服なんて着させてくれたの？」
手櫛で髪を整えていた。猫で言う毛繕いのようなものか。

「裸だったんだからあたりまえだろうが」

「昨日と同じで私はいいんだけどな」

お前がよくても俺が駄目なんだ。

「兄さん」

「なんだ」

「お腹空いた」

俺はキッチンで朝食と昼食を兼用した食事を作り上げた。が、問題はあいつだ。俺の前には猫缶と人間用の食事を二人分用意してある。体は人間なんだから人間用の食事なのだろうか。

「兄さん。ご飯まだあ」

我慢ができなかったのかアイカが直接出向いた。アイカはテーブルの上を見るなり猫缶を持ってキッチンを出て行った。

「先に戻ってるね」

そっちでよかったのか。俺は大目の食事を持って戻ることにした。

部屋に戻るとアイカは猫缶とスプーンを目の前に置きコタツでくつろいでいた。

アイカの向かいに入るなり猫缶とスプーンを渡された。

「兄さん。あゝん」

アイカは大きく口を開けて待っていた。

「いいかげん自分で食べる」

猫缶とスプーンをアイカに押し返した。

「むう」

頬を膨らませアイカは手で食べ始めた。口を直接持つていけないのは人間らしいが口や手が汚れるのを気にせず食べているのは同じ年齢の子にはみえなかった。まるで生まれたての子供のようだ。

「お前本当に猫」

猫缶を食べ終わったアイカは手を舐めて口を拭っていた。俺は質問をそこで辞めた。この動きは猫そのものだ。

「むう」

「お前どうして人間の姿になったんだ」

アイカは口先を尖らせそっぽを向いてしまった。顔は相当不機嫌そうだった。

「どうしたんだよ」

「名前」

「はあ？」

「アイカって呼んでくれなきゃ答えない」

そんなことに腹を立てていたのか。そう言われれば人間のアイカを見てからずっとお前って呼んでいたような気がするな。

「分かったよ。アイカ、どうして人間の姿なんだ」

満面の笑みを見せ俺に近づき抱きついてきた。下から見上げるアイカの目が可愛く見惚れるものだった。

「あのね。年頃の猫には良くあることなの」

俺はペットを飼ったことが無いがそれは絶対に嘘だとわかる。

「嘘つきは夕飯抜きだぞ」

「だってえ、アイカにも分からないんだもん。猫の姿にも戻れるみたいだけど」

アイカはコタツに潜り込んだ。そして出てきたのは猫のアイカだった。こたつの中を見てみると制服だけが残されていた。

またアイカがコタツに戻ると人間のアイカが出てきた。

「ね、凄いでしょ、ってうえあわ」

俺は制服をアイカに投げつけた。こいつ、見た目は人間のくせに

頭は猫のままなのか。

「いいから服を着ろ！」

「だ〜か〜ら〜、一人では無理だって」

こんな緩い午後を俺達は過した。残された時間が少ないとも知らずに。

夜、湯船でようやく一人安らく時間を堪能していた。ぬるめのお湯につかりながら疲れが取れることも無かった休みを振り返っていた。アイカを拾って疲れることばかりだったけど退屈はしなかった。後悔はしていない。それでいいではないか。

「明日から学校が……」

アイカの奴一人で大丈夫だろうか。もしかしたらついてくるかな。俺は微笑みながら頭までお湯につかった。

「兄さん。アイカも入る！」

曇りガラスの奥で肌色の何か MOZOMOZ 動いているのが分かる。着ることすらできない服を無理矢理脱ごうとしているのだ。

「ま、待て。俺はもう出るから」

最小限を隠して慌てて出ると中途半端になったアイカがいた。俺は急いで自分の部屋へ戻った。

「あ、兄さん待ってよ」

俺はアイカ用のパジャマと布団を準備して待っていた。数分後、制服を着たアイカが戻ってきた。どうやら一人で着ることができたようだ。

「ほら、パジャマ、これに着替えるんだ」

パジャマを持って俺に微笑んできた。

「兄さん。きがえ」

「自分で着替えられるんだろ。自分でするんだ」

明かりを消してアイカに背を向け布団にもぐりこんだ。後ろで布のすれる音がする。

俺が眠りにつけそうになった頃冷たい風が入ってきて暖かいものが背中に当たった。

振り返ると笑顔のアイカが俺の布団の中に入ってきた。

「えへへ、兄さん」

その無邪気で可愛い笑顔に俺の箍は音を立てて壊れた。

「いい加減にしる！」

立ち上がった俺は何が起きたのか分からずポカーンとしているアイカの顔を睨みつけていた。

月明かりだけが俺達を照らしていた。

「に、兄さん？」

俺の裾をつかもうとする手を払いのける。ここまではつきりとアイカを拒んだのは初めてだ。アイカも叩かれた手を撫でながら俺を潤んだ瞳で見ている。

「俺はお前の兄なんかじゃねえ」

俺の大声にアイカは震えていた。それを見ても俺は止まることができなかった。

「俺のことを兄と呼んでいいのはな、愛華いもことだけなんだよ」

アイカは俯いていたがそこまで言っただけでアイカが話し始めた。

「この姿になつてからアイカに触れてくれなくなった。ご飯も、お風呂も、寝るのも一人でつて、前みたいにぎゅって抱きしめてくれなくなった」

涙をぼろぼろ流しながら訴えてきた。アイカが今まで我慢していたこと、して欲しかったことを次々と言い出した。そして、一息置いて一番大きな声で一番思っていたことを叫んだ。

「こんなことになるなら人間の姿になるんじゃないかった！」

窓を開け放ち雪の降る中アイカは外に出て行った。

「アイカ！」

俺もそれを追いかけて外に出た。

最終話 妹

雪の積もった分かれ道、足跡があの場所へと続いていった。俺は追いかけるかどうか一瞬悩んだ。アイカはただの猫だ。それなのにここまで必死になって追いかける必要があるのか。どうせ腹が減つたら帰ってくる。根拠の無い考えが俺の足を家の方へと変えようとした。

帰ろうとする俺の考えを押さえ昔の記憶が戻ってきた。そうだ俺はここでアイカなら一人で大丈夫だと思っていた。けど実際は俺が助けなければアイカは死んでいたかもしれない。そう思うと見に行くだけいってみようと思った。

やっぱりアイカは捨てられていた場所に座り込んでいた。冬用の征服には薄く雪が積もってアイカの吐く息は白く時折震えていた。「こんなに冷たくなって」

マフラーをアイカの首に巻いて隣に座った。アイカは一度俺の顔を見たが遠くを見ているように視線を外した。

「さつきは言い過ぎたごめん」

まったく俺の顔を見ようとしてくれない。相当怒っているんだな。「本当の兄さんじゃないって嫌ってほど分かってた」

顔は見てくれない。ただは話だけをしてくれた。

「アイカ達は生まれてすぐに捨てられたんじゃないの。短い間だけみんなで暮らしてた。でもね、急にみんなそろってここに捨てられたの。でも、兄さんや姉さんがいたから、アイカは怖くなかった。だけど、兄さんや姉さんが連れて行かれてアイカ一人になって寂しくて怖かった。ずっと一緒にいようって約束したのにみんないなくなっ……」

声を上げながら泣いているアイカの手を握った。冷たく細い手だったが決して離したくないと思う気持ちが握る力を強くした。

「迎えに来るって、約束もしたのに、誰も来てくれなくて…」

だからか、アイカが何かあるとここにいたのは。連れて行かれそうになると噛み付いて拒んでいたのはその約束があったからか。

「怒られた時、もう誰もアイカに優しくしてくれないって思ってた。怖くなって」

アイカの瞳は恐怖と悲しみが溢れていて誰でもいいからすがりつきたいと叫んでいるようだ。

「もう、一人になるのはいや！」

強くアイカを抱きしめた。アイカも俺に抱きつきながら泣き続けた。

「大丈夫だ。もう一人にさせない。ずっと俺と一緒にいてやる」

「ほ、本当？」

「ああ、俺がアイカの兄貴になってやる」

「に、兄さん」

手を繋いで家へ帰る途中、高校生ぐらいだろうか男女5人ほどの集まりがこちらへ歩いてきた。

その団体が見えた途端アイカが歩くのをやめ立ち止まった。

「どうしたんだ」

団体の中から一人の男がこちらに来た。見たこと無い顔だ。

男はいきなりアイカの頭を撫でた。馴れ馴れしい奴を通り越して失礼な奴だ。

だがアイカは顔を伏せていた。その横顔は頬を赤くして喜んでいるようにも見えた。

「ちゃんと迎えに来たぞ」

「迎えに？まさかこいつら」

「兄さん」

アイカに呼ばれたのは俺ではない。目の前の男だ。

「貴方が妹の飼い主ですか」

男は暗い顔をして後ろを振り向いた。他の兄妹は頷いて答えた。

「これからも妹をよろしくお願いします」

深く頭を下げた男はアイカを置いて帰ろうとした。

「兄さん。これからどうするの」

「なに、暖かい場所を探してみんなで暮らすさ」

「飼い主の所には帰らないの？」

「みんな、帰りたいたい家じゃなかったからな」

帰りたくない家、馴染めなかったのかそれとも……

「お前のご主人はいい人みたいだな」

最後にアイカの頭を撫でて俺達から離れていった。

「あ、あ、うう」

俺と去って行く兄の背中を交互に見ながらアイカは戸惑っていた。

繋いでいた手を離しアイカの背中を押した。

アイカを受け取った本当の兄は俺を見て全て分かっていたようだ。
「兄さん？」

アイカは俺の顔を見て驚いていた。そして、アイカも察したのか泣き出しそうになった。

「泣くな！家族と仲良く暮らすんだぞ」

「に、兄さん」

暴れるアイカを兄が抑えてくれている。助かった。もし、近づか
れたら俺の気持ちが変わってしまう。

「アイカを…俺の妹をよろしくお願いします！」

「兄さん！」

走った。少しでも早くアイカから離れたくて。

アイカが俺を呼ぶ叫びが頭の中で響いて木霊していた。

次の日、眠れず朝を迎えた。布団の中には一人分の温もりだけ、
朝日が時の流れを知らせいつもの生活が戻ってきた。

まだ心のどこかに引つかかる何かが取れなくて外に出た。白い世界を朝日が照らし晴れ渡った美しい朝が目の前に広がっていた。

その白い世界の一点に輝く鈴とリボンがあった。

鈴とリボン。これにまたアイカの思い出が増えたなと思いつつ、携帯を取り出した。

「ああ、親父。……あのさ、来月帰って来られるかな。……その……愛華の命日、三人で墓参りに行かないか」

最終話 妹（後書き）

いかがでしたでしょうか？
今回のテーマは『暖かい恋』です。

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくは PDF 小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6131d/>

演劇 I F ストーリー 猫と絆

2009年3月24日11時06分発行